

【奈良国立博物館】 (計10件)

<彫刻> (3件)

1 名称	木造普賢菩薩坐像 (もくぞうふげんぼさつざぞう)	品 質	木造 (ヒノキ材か) 彩色
作者等		員 数	一軀
時 代	平安時代 (11世紀)	寸 法 等	像高46.2cm 髪際高34.5cm
作品概要	ヒノキと推定される一材から彫り出された坐像。手先や天衣まで同材から作り出す構造は古様で、表情や四角張った輪郭は10世紀の特徴を示すが、厚みを減じた体軀や浅い脚部衣文の様子から、11世紀初め頃の制作と推定される。頭部の宝冠には孔があり、小さい五仏を取り付けていた可能性がある。近年の当館職員の調査により、かつて吉野山に伝来したが、明治時代初めに個人に譲渡された像であることが判明した。		
購入金額	35,000,000円		



2 名称	木造不動明王および二童子立像 (もくぞうふどうみょうおうおよびにどうじりゅうぞう)	品 質	[不動明王] 木造 (ヒノキ材か) 彩色・截金 [矜羯羅童子・制吒迦童子] 木造 (ヒノキ材か) 古色塗り
作者等		員 数	三軀
時 代	不動明王：平安時代 (12世紀) 矜羯羅童子・制吒迦童子：江戸時代	寸 法 等	像高 不動明王96.3cm 矜羯羅童子52.0cm 制吒迦童子51.3cm 髪際高 不動明王90.5cm 矜羯羅童子48.9cm 制吒迦童子49.6cm
作品概要	不動明王に矜羯羅・制吒迦の二童子が従う三尊像。不動明王像は、誇張の少ない憤怒相や柔らかな質感の着衣表現、彩色と截金を交えた華麗な文様など、平安時代後期彫刻の魅力が凝縮されており、明王像の優品である。ただし二童子像は江戸時代の補作のため、当初から三尊型であったかは不明である。近年の当館職員の調査により、かつて吉野山に伝来したが、明治時代初めに個人に譲渡された像であることが判明した。		
購入金額	42,000,000円		



3 名称	木造天部立像 (もくぞうてんぶりゅうぞう)	品 質	木造 (ヒノキ材か) 彩色
作者等		員 数	一軀
時 代	平安時代 (11世紀)	寸 法 等	総高116.5cm 像高103.4cm 兜際高84.8cm
作品概要	兜を被り、両袖を翻して邪鬼の上に立つ天部立像。邪鬼を含め全体を一材から彫り出している。両目を大きく開いたいかめしい顔つきは平安時代前期の特色だが、厚みを減じた体、手足が細く軽快な身振りなどは平安後期へとつながる要素であることから、11世紀初め頃の制作と推定される。近年の当館職員の調査により、かつて吉野山に伝来したが、明治時代初めに個人に譲渡された像であることが判明した。		
購入金額	30,000,000円		



<絵画> (1件)

1 名称	春日吒枳尼天曼荼羅 (かすがだきにてんまんだら)	品 質	絹本着色 掛幅装
作者等		員 数	一幅
時 代	室町時代16世紀	寸 法 等	本紙：縦94.5cm 横38.6cm (表具：縦166.2cm 横53.3cm)
作品概要	社殿は表されないものの、一之鳥居と御蓋山・春日奥山の存在によって春日大社の神域を描く画像と理解される。山の上空には3つの円相が描かれ、中央の白色大円相は伊勢外宮の豊受大神を象徴する可能性が高く、向かって左小円相内には北斗七星第一星の貪狼星の擬人像、右の小円相内には虚空蔵菩薩が表される。さらに一之鳥居上には白狐に乗る吒枳尼天と勢至菩薩が描かれる。春日曼荼羅としては極めて特殊な構図であり、伊勢神道と春日信仰が重層的に結びつく複雑な信仰背景があったと推定される。		
購入金額	5,000,000円		



<書跡> (1件)

1 名称	三品弟子経 (中聖武) (さんぼんでしきょう (ちゅうじょうむ))	品 質	紙本墨書 卷子装
作者等		員 数	一巻
時 代	奈良時代 (8世紀)	寸 法 等	縦27.8cm 長141.3cm
作品概要	原料である植物の甘皮の細かい粒を漉き込んだ料紙、茶毘紙を用いた奈良時代の写経。茶毘紙とは釈迦の骨粉を混ぜ込んだ紙に見立てられた呼称で、茶毘紙を用いた写経としては、大字で書写された奈良時代の『賢愚経』、いわゆる「大聖武」が有名である。これは特徴的な料紙と堂々とした文字ぶりから、古筆鑑定の世界で書き手を聖武天皇と伝承してきたことによる呼称である。 本品は茶毘紙を用いながら、一般的な写経と同様に1行17文字で書写されており、こうした特徴を持つ奈良時代の写経は「大聖武」にならない「中聖武」と呼ばれてきた。本品は3紙からなるが、欠落や裁断もなく、本紙は完存している。赤密陀を塗ったと思われる撥型軸は、制作当初より本品に付いていたかは不明であるが、奈良時代のものである。		
購入金額	38,500,000円		



<金工> (2件)

1 名称	六器 (ろっき)	品 質	銅製 鑄造 鍍金
作者等		員 数	一口
時 代	鎌倉時代 (13~14世紀)	寸 法 等	口径7.9cm 高3.1cm 高台径4.0cm
作品概要	鏡外面に八葉蓮華を表す六器で、この型式は「蓮弁飾六器」「慈覚大師請来形六器」と通称される。附属の台座にも同型式の文様を表しているが、作風に若干の違いが見られる。		
購入金額	2,100,000円		



2 名称	金銅火焰宝珠形舍利容器（こんどうかえんほうじゅがたしやりようき）	品 質	宝珠形容器は水晶製 その他は銅製、鑄造、鍛造、彫金、鍍金
作者等		員 数	一基
時 代	鎌倉時代(13~14世紀)	寸 法 等	総高15.3cm 最大幅（下框）7.7cm 宝珠形容器高3.8cm 同径3.0cm
作品概要	多層からなる蓮華座に火焰宝珠をいただいた舍利容器。真言密教では舍利と宝珠を一体とみなす説があり、火焰宝珠形舍利容器はこうした説に則って作られるようになったと考えられる。本品は、小型ではあるが、細部の造形に高水準の金工技術を示す優品である。		
購入金額	14,000,000円		



<染織> (3件)

1 名称	白地唐花文氈断片（しろじからはなもんせんだんぺん）	品 質	獣毛（羊か）製 染色
作者等		員 数	1枚
時 代	唐または奈良時代(8世紀)	寸 法 等	縦26.5cm 横24.0cm 厚0.4cm
作品概要	各色に染めた獣毛を、地となる獣毛に重ねて圧縮させた、いわゆる花氈の断片。法隆寺献納宝物（東京国立博物館蔵）の中にある「白地唐花文氈」の1つと同一の素材・技法・文様構成をとることから、法隆寺伝来品であったことがわかる。花氈は、法隆寺献納宝物中に2点ある他は正倉院宝物にしか存在せず、極めて貴重な遺例である。		
購入金額	2,100,000円		



2 名称	経帙（きょうちつ）	品 質	竹製 雲母引 縁は絹製 錦織 金具は銅製鍍金 木牌は木製
作者等		員 数	一枚
時 代	平安時代（12世紀）	寸 法 等	縦31.2cm 横46.0cm
作品概要	京都・神護寺において一切経を包んでいた「神護寺経帙」と通称される経帙の遺品。和紙を芯とし、細い竹籤を密に並べ色糸を用いて飾り編みする。表面は錦で縁取りし、裏面は綾が張られ、中央に「神護寺」の朱印が捺される。外帯には金銅製蝶形金具が取り付けられる。		
購入金額	14,000,000円		



3 名称	刺繍阿弥陀三尊来迎図（ししゅうあみださんぞんらいごうず）	品 質	絹製、平絹地に刺繍 種子、讃文、仏・菩薩の頭髮、阿弥陀如来における袈裟の縁・堅条・横堤、菩薩の裾裾には髪繡を施す 軸装 軸端は銅製透彫
作者等		員 数	一幅
時 代	鎌倉～南北朝時代(13～14世紀)	寸 法 等	本紙：縦69.3cm 横30.1cm
作品概要	中央の阿弥陀如来と下方左右に観音・勢至菩薩を刺繍で表した三尊像。鎌倉～南北朝時代に制作された刺繍の来迎図として、代表的な型式を備えている。特徴的な点としては、表具を表した部分に種子で釈迦三尊を刺繍している点、阿弥陀如来が正面向きである点が挙げられる。当初の型式を比較的良好に保存した中世の作品として重要である。		
購入金額	5,000,000円		

